

厚生文教常任委員会行政視察報告

1. 視察日程 平成28年9月28日(水)～30日(金)
2. 視察場所 北海道滝川市
北海道余市郡余市町
3. 視察参加者 小春 稔 阿部 長夫 有田 昭二 真砂 矩男
藤本 治郎 堀 典義
(随員) 河野 真二

4. 視察事項

【視察日】平成28年9月28日(水)

【視察先】滝川市立病院

【対応者】事務部長 田湯 宏昌 事務課長 堀 勝一 議会事務局 藤井美咲

【目的】杵築市立山香病院の老朽化に伴い、今後の病院建替等が検討されている。滝川市立病院は5年前に建替えられており、完成まで完成後の経過を視察する。

【視察内容】滝川市(病院改革と健全経営に向けた取り組みについて)

事務課長より(1)医療体制の状況(2)病院経営の状況(3)地域との連携について説明を受け、終了後に院内見学(耐震構造等)を行った。

(1)医療体制の状況は、「マグネットホスピタル」をスローガンに、患者やスタッフを磁石のように惹きつける。魅力ある病院を目指し、地域の医療機関との連携をもとに協働し、戦略的・効果的な投資を行い、黒字化を目標としている。

- ・滝川市の人口推計 40,875人(平成27年度)。25年後は、28,176人
- ・医師数 43名を前後。診療科数 11診療科(非常勤医師対応を含む)
- ・病床数 314床(開設時 400床 建替前 350床)看護師は7対1を目標
- ・市立高等看護学院(3年制)を併設 全75名(1学年25名中15名程度が市立病院へ)

(2)病院経営の状況は、戦略目標を設定し、安定した経営を目指す。

- ・経常収支は、建替前のH17 △300万円 H18からH22 1億から200万円。建替後からH23 △8,000万円 H24 △2.8億円 H25 △1.9億円 H26 △4.3億円と経営は今後15年は赤字が続く予想が問題である。本體工事110億円(医療機器は再利用し、更新は10億円)
- ・利用率は、1日平均 外来患者 815人前後、入院患者 227人で目標 外

来患者 900 人、入院患者 250 人と届いていない。

- ・薬剤管理指導業務は、14%増、後発品切替状況は 84%
- ・理学療法稼働率は、103%であるが、前年度比△5%減
- ・包括ケア病床運用状況は過去最高になり、4,000 万円の効果
- ・戦略目標は、3 年毎に中期計画を立て、具体的な目標の位置付けと、先進地である松阪市民病院の「落穂拾い」をモデルに改革に取り組んでいく。

(3) 地域との連携は、外来患者からのアンケート実施、「そらねっと」の構築、市民団体との協働で、院内ボランティアや菜の花応援団、ふれあいフェスター等。

【所 感】 滝川市立病院を視察して、一番は病院本体工事には巨額の資金が必要であり経営が黒字でも 15 年から 20 年は赤字が続くのが現実である。医師確保のための努力や関係医療機関との連携をはじめ、地域との共生を目指している。また、看護師確保のための高等看護学院を運営する等努力が感じられた。院内改革を実践するにあたり、先進地を目標にしながら具体的ニーズに合う病院を目指しており、我が山香病院も見習う点は多いのではないかと感じた。

時代の流れが加速する中に、取り残されない地域医療の構築は大変難しい課題であるが、眺めているだけでは、何も変わらず消えていくだけである。地域との連携を主軸に、民間の活力を最大限協力頂き、愛される病院を建てることを目指す努力を忘れてはいけないと感じた。

議会としても、今回「杵築市の地域医療を考える特別委員会」を設置し、地域医療を先進地の成功例を市民模範に、市民目線で議論していきたい。



【視察日】平成 28 年 9 月 29 日（木）

【視察先】北星学園余市高等学校

【対応者】北星学園余市高等学校 校長 安河内 敏

【目的】当校は不登校・非行などの理由で高校進学断念や中退生を積極的に受け入れ、高校卒業さらに大学や専門学校入学などの成果をあげており、本市の教育行政に資するため

【視察内容及び所感】

（1）概要

北海道北後志地区の生徒教育を目的に 1965 年余市町の誘致により、主に余市・小樽近郊の生徒の受け皿として開校。1988 年全国から高校中退者を受け入れる転・編入制度を実施。同校の先進的な方針はマスコミに大きく報道され、全国的な反響を呼んだ。

しかし、2015 年新入学生徒が 40 名（定員 140 名）になり、母体である北星学園（札幌市）は廃校を検討している。

生徒が減少した主な理由は、授業料と下宿代で月 10 万円かかるからである。生徒の 1/4 は非課税世帯であり、入学金免除や下宿代半額補助などを行っている。

（2）安河内校長先生より説明

①最初に同校生徒が製作した、「2014 年全映協グランプリ」で学生の部優秀賞作「道しるべ」の説明があった。

この作品は、回り道をして入学し、いずれも 20 歳を過ぎている在校生の生活を 1 年間追ったドキュメンタリー。うち 3 人は 3 年生で、最後は卒業式の場面で終了する。

「富山県出身の生徒会長・坪島は以前、暴走族の仲間に入り学校を中退した。北星余市に入ってから、前の高校の野球部顧問の温かさが忘れられず、進学して将来教師を目指す。24 歳の 3 年男子は、いじめを受けたことをきっかけに女性恐怖症になる。ほかにも、子どもがいるが離婚し、再び高校からやり直している 21 歳の 1 年男子などが登場している。そして、この 3 年生 3 人は希望を持ち大学、専門学校に進学する。」坪島は卒業式の答辞で「親を恨んだ時期もあったが、この学校に来て多くの友人と会い、自分の道しるべを持つことができた」と感謝する。

②次に余市、小樽のある北後志地域の進学状況に触れ、札幌は人口流入があり十勝は農業で仕事があるが北後志地区は人口流出により人口が減っ

ている。道立高校の閉鎖もあったが、札幌の高校に行ったら卒業生は帰ってこない。小樽や余市の高校にとどめる様にしなければならない。

③ 余市高校生徒の特色としては

●中退者・不登校経験者を全国から受け入れ

高校を中途退学した子どもや小中学校・高校で不登校になった子どもを積極的に受け入れている。年度途中の転・編入生も随時受け入れている。

●生徒の年齢は多様で上は30歳ぐらいである。

●現在、高校中退者が全校生徒の40%、また不登校経験者が約60%近くに及んでいる。

●中退、不登校の原因はめちゃくちゃな生活環境、進学校でついていけない、障害者になったことを契機、けがが原因で部活を辞める、部活内のいじめなどである。

●生徒減の危機からいつも受け入れ条件をひろくしてきた。

●生徒はみな違う環境、体験をして入学している。これは文科省の高大接続改革の方針に沿うものである。いま地域にいる人が多様である。

【高大接続改革とは】安河内校長の説明より

文科省の教育改革方針で、グローバル化の進展などで子供が大学を卒業するときには職業に就くかもしれない。世界の高等教育で求められるのは、知識、スキルではなく思考、判断、表現力に加えたような他者と主体的に協働する能力が必要になる。問題解決、参加型の教育が必要になるなどの考え方を示している。

●そのため余市高校はイベントを増やしてきた。外に活動を広げることでいろいろな事件が起こり、いつもいろいろな意見の中でものごとを考えなくてはならない。2015リタプロジェクトでは小樽商科大の学生とワインづくりのため農園を整備したり、納屋を改造して地域活動に参加した。

④ その他

●いま余市高校は廃校の危機にある。1学年90人の新入生がないと存続できないと、理事会が決めた。全国のOB父兄に協力してもらい2016年は前年より入学者は増えて61名だが90人には達していない。学費と全寮で10万円ほどかかることもネックになっているが非課税世帯4分の1で、寮費の6万7千円は私学奨学金が3万5千円で親の負担は3万2千円である。大分の二豊学園の先生とも連絡を取っている。

●ヤンキー先生で有名になった義家文科相副大臣は余市高校出身であるが、経営危機問題では副大臣は全国の教育を見なければならぬので、1高校にはかかわれないと言われたとの事。義家氏と余市高校の関係は良くないようでした。

(3) 特徴点

①生徒の9割近くが寮・下宿生活

全国から生徒が集まるようになり、現在、道外出身者が生徒の約8割を占める。道内の遠隔地出身者も加えると、9割近くの生徒が寮・下宿で生活している。

- また、同校が直接経営する寮・下宿はなく、すべて学校周辺の地域住民によって運営されている。
- 不登校や引きこもりになって学校生活・社会生活から離れた子どもが、自宅から通える学校に入学しても、自力で生活を立て直すのには相当の困難を伴うということから、遠隔地から同校に入学した生徒は、親元を離れ、海と山に囲まれた自然豊かな余市町内の寮・下宿で集団生活をすする。
- 寮・下宿のおばさん・おじさん、学校のクラスメイト、先輩・後輩、教師たちと、時にぶつかり、時に励まし励まされるというかかわり合いの中で、生徒たちは自主性、自発性、自立性を高め、「生きる力」を育んでいく
- また、親子が距離を置くことで父母と生徒の関係も変化していき、家族関係の修復、再構築がはかられていく効果もあるといわれる。
- 「子どもたちを集団の中で育てる」という北星余市の教育方針が、地域・学校・家庭・生徒が一体となった教育の実践のなかで生かされている。

②入試制度

1年生からの入学を希望する場合は、中学校長の推薦を要する推薦入試と、推薦を要しない一般入試がある。一般入試には、筆記試験と面接のある一般試験と、保護者同伴で面接を行う予約面接試験の2種類がある。

2年生、3年生からの転・編入希望者には、筆記試験と面接のある試験と、保護者同伴で面接を行う予約面接試験の2種類がある。

③年間行事

「『生きる力』は人と人のかかわりの中でこそ養われる」として、学校行事を重視している。生徒が主体となって行事を企画実施している。

〈主な行事〉

- 4月 - 入学式・対面式
- 5月 - 1年生研修会（1泊2日の研修会で懇親を深める）
- 6月 - 強歩遠足（30km、50km、70kmコースの中から選ぶ、マイペースで歩く）
- 7月 - 夏季スポーツ大会（クラス対抗）
- 9月 - 北星祭（クラス対抗の合唱コンクール、模擬店、各種作品展、ライブ、バザーなど）
- 11月 - 2年修学旅行（平和学習の一環として4泊5日で沖縄へ。生徒が企画）
- 12月 - 冬季スポーツ大会（クラス対抗）・海外研修（希望者のみ冬休中に実施）
- 2月 - 予餞会・スキー遠足
- 3月 - 卒業式（自由な服装で卒業を祝う。時間をかけ一人ひとりに証書を渡す）

このほか、生徒会主催の浜掃除（ボランティア活動）や映画上映会など各種イベントが開催されている。

④卒業後の進路

卒業後、推薦入試、AO入試、一般入試等を経て、30～40%の生徒が四年制大学へ、20～30%の生徒が専門学校に進学している。キリスト教系高校なので、同系大学に進学し易く明治学院大学などの進学も可能であるとのことである。

（4）視察後の考察

①非行、不登校問題は全国各地にあるが解決策は少ない、友人問題、家族関係、競争社会などのなかで立ち直れない人たちが多く、余市高校の存在は大きい。しかし、その中で高校の定数割れを理由とした廃校問題があることは意外であった。

その原因として安河内校長先生は、中退者が手軽な通信教育を利用して、全国の通信教育の卒業者は非常に少ないことや、対人関係の解決にならないことを述べていた。また、低所得の家族が学資を出せないことで断念していることも理由の一つに挙げている。日本の格差社会の実情であろう。

非行、不登校問題を扱っている学校は少ないので、余市高校を廃校にすることの無いよう関係者や社会全体の努力と関心が求められます。義務教育の中学の問題についても同じ解決はできないが、考えさせられた。

②校長先生は北九州黒崎の出身、奥さんは大分出身で時々大分に行っているとのこと、杵築も訪問してみたい意向であった。ぜひ杵築で再会したいと思う。

